The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイツにおける日本人交換留学生のネットワーク構築に関する考察 : ネットワーク機能を中心に
Author(s)	中野, 遼子
Citation	大阪大学言語文化学. 2014, 23, p. 17-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドイツにおける日本人交換留学生のネットワーク構築に関する考察

—ネットワーク機能を中心に—*

中野　遼子**

キーワード：ネットワーク機能、在独日本人交換留学生、タンデムパートナー

In der vorliegenden Arbeit analysiere ich die Funktion sozialer Netzwerke der japanischen Austauschstudenten für ihre Anpassung an das Leben in Deutschland.

Als Untersuchungsmethode habe ich Interviews mit 16 Japanern durchgeführt, die zwischen 2006 und 2012 für ein Jahr als Austauschstudenten an den Universitäten München, Erlangen-Nürnberg, Göttingen, Köln und Trier studiert haben.

Aus diesen Untersuchungen lässt sich erkennen, dass soziale Netzwerke für japanische Austauschstudierende in Deutschland einen positiven Einfluss haben und sechs Funktionen erfüllen; die Funktionen 3-b und 3-c, sowie der Aspekt einen Platz in der Gesellschaft einzunehmen aus Funktion 1, werden in dieser Untersuchung neu erarbeitet:

1) Funktion als psychologische Stütze: Erzeugen von Ablenkung, Vertrauen, Beruhigung und dem Gefühl einen Platz in der Gesellschaft einzunehmen;
2) Funktion des Erlernens der deutschen Sprache;
3) Funktion des Lernens der deutsche Kultur;
   a) Funktion der Vermittlung der deutschen Kultur;
   b) Funktion der Vermittlung von interkultureller Erfahrung: das Erleben von Erfahrungen, die anderweitig nicht gewonnen werden könnten, wie z.B. des Besuch eines deutschen Haushalts;
   c) Funktion der Handlungserweiterung von interkultureller Erfahrung: Ermöglichung des Ausprobierens neuer Dinge, zu denen man alleine keinen Mut hätte, durch das Einladen von Freunden aus den sozialen Netzwerken;
4) Funktion des Informationsaustauschs;
5) Funktion der Unterstützung im Alltag;

---

* Die Funktion sozialer Netzwerke für Austauschstudenten am Beispiel japanischer Studenten in Deutschland (NAKANO Ryoko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

6) Funktion der Freundschaftsvermittlung.

Die zusätzlichen Aspekte aus Funktion 1 sowie Funktion 3-b werden besonders durch Tandem-Partner ermöglicht. Die von mir durchgeführten Interviews legen nahe, dass besonders diese Funktionen wichtig für japanische Austauschstudenten sind, um sich an das Leben in Deutschland anzupassen, weil es in Deutschland empfohlen wird, dass Austauschstudenten sich einen Tandem-Partnern suchen.

Aus dieser Untersuchung kann man erkennen, dass (1) die Funktion als psychologische Stütze für Austauschstudenten in Deutschland eine große Rolle spielt und dass (2) die sozialen Netzwerke interkulturelle Erfahrungen an Austauschstudenten vermitteln und erweitern . Diese zwei Punkte werden in der aktuellen Forschungsliteratur nicht behandelt, stellen aber sehr wichtige Aspekte sozialer Netzwerke für interkultuelle Anpassug der Austauschstudenten dar.

1 はじめに

近年、海外で学ぶ日本人学生数が減少傾向にあると言われ、就職活動の早期化や若者の「内向き志向」がその原因として指摘されている[1]。しかし、大学間協定等に基づいて留学する学生に限れば、2008 年には 24,508 人であったのが、2010 年には 28,804 人とその数は以前より増加している[2]。さらに、筑波大や一橋大などの有力大学が、留学しても 4 年間で卒業できる制度づくりに相次いで乗り出し[3]、文科省は 2013 年度から大学生・院生を対象に海外留学費援助を 1 万人台に増やす方針を決定しており[4]、今後日本人留学生が徐々に増加することが予想される。先行研究により、留学生が現地で構築するネットワークが彼らの言語習得や留学への満足度に大きく関係していることが指摘され（内海・吉野、1999:30)、現在「内向き志向打破」を狙う日本にとって、ネットワーク理論の観点から日本人留学生の異文化適応過程を研究することは、今後よりいっそう必要となるであろう。

そこで本研究では、ドイツへ交換留学経験のある日本人にインタビューを行い、彼らが現地で構築したネットワークがドイツ留学生活への適応にどのような役割を果たしているのか、その機能を明らかにするために調査を行った。

---

[1]「育てグローバル人材」『日本経済新聞』2011/01/18/ 火・夕刊（1)

[2] 文部科学省「留学生短期受入れと日本人学生の海外派遣を一体とした交流事業」文部科学省高等教育局、2012 年（2013/10/02）http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/06/19/1322352_1.pdf

[3]「留年せずに留学しやすく」『日本経済新聞』2012/08/11/ 土・夕刊

[4]「大学留学費 1 万人援助」『日本経済新聞』2012/9/6/ 木・夕刊

2 先行研究

留学生の異文化適応とネットワークを扱った先行研究は、大きく2つに分けることができる。ソーシャル・サポートの分野と、留学生のネットワーク機能に着目した研究である。

第一にソーシャル・サポートの分野では、高井（1994）と田中（2000）が在日留学生に対するソーシャル・サポートを、高井は4種類、田中は7種類（p. 22の表2参照）と予め想定し、それらのサポートが期待できる相手を、高井は同国人、外国人、日本人、田中は指導教官、同じ研究室の人、チューター、大学教職員、学生、ホストファミリー、同居家族、親せき、そのほかの友人・知人に分けて調査を行った。その結果、高井は留学時期により、また田中はサポートを期待する相手により、必要とされるサポートの種類が異なることを明らかにした。

次に、ネットワークの機能に関する研究では、中山（2001）が日本のある大学で、英語プログラムに参加していた外国人短期留学生にインタビュー調査を行い、留学生活におけるネットワークの5つの機能（情緒的機能、日本語機能、情報提供機能、媒介機能、仲介機能）を提示した。また、工藤（2003b）は、在豪日本人留学生に関する事例研究を行い、S・ボクナーら（1977）の「友人ネットワークの機能モデル」の修正案を示した。

以上のように、留学生のネットワークに関する研究は多くなされているが、日本人交換留学生のネットワーク研究は非常に少ない。そこで、本研究では、主に中山（2001）を参考にしながら、これまでほとんど扱われてこなかったドイツへ派遣された日本人交換留学生が構築したネットワークに焦点を当て、ネットワークが彼らの留学生活に対してどのような機能を持っているのかを明らかにしたい。

3 調査方法

3.1 調査概要

ドイツで1年間の交換留学を経験した日本人16名に、2012年3月と8月の2回インタビュー調査を実施し、主に2つの事柄について尋ねた。1つ目は、自身の留学生活やドイツ語学習について振り返ってもらった。もう1つは、「ドイツ留学で関わったと思う人」を挙げてもらった。3月のインタビューでは、中山（2001）を参考にして、「関わったと思う人」を5人挙げてもらい、その人との関係、出会いのきっかけ、交流頻度、エピソードを尋ねた。8月には、協力者が思いつく限りの人を挙げてもらい、3月の調査と同じ質問をした。

3.2 調査協力者

本稿で取り上げるのは、2006年から2012年の間に、ドイツのミュンヘン大学、エアランゲン・ニュルンベルク大学（以下エアランゲン大学）、ゲッティンゲン大学、ケルン大学、トリア大学のいずれかに1年間の交換留学経験がある日本人16名である。インタビュー調査に協力してくれた16名を以下、協力者と呼ぶ。協力者の内訳は以下の表の通りである。

表1 インタビュー協力者の内訳（括弧内は男性協力者の人数）

	ミュンヘン大学	エアランゲン大学	ゲッティンゲン大学	ケルン大学	トリア大学	合計
(単位：人)	2	9 (1)	2	2	1 (1)	16 (2)

3.3 分析方法

文字化された口述データを基に、それぞれのネットワークが協力者の異文化適応に果たす役割をネットワーク機能として分類した。そして、分類された各項目の具体例となる部分を抜き出し提示する。

4 結果と考察

本節ではまず、ドイツの大学における交換留学制度について簡単に説明する。そして協力者16名から得られたインタビューデータを分析し、結果をまとめ、考察を行う。

4.1 ドイツの大学における交換留学制度

ドイツの大学は、学期が始まる1ヶ月前に、ドイツ滞在手続きに関するオリエンテーションと2～3週間の集中ドイツ語コースを実施しており、それらへの参加を推奨している。そのため、多くの日本人交換留学生は3月か9月に渡独する。ドイツ語コースには町の観光や映画鑑賞会などのプログラムも用意されている。

新学期が始まると、留学生向けのドイツ語や自分の専門分野の授業を受講する。ドイツへ交換留学する日本人学生は主に学部2～4回生の学生であり、大学院生は16名の協力者のうち2名だけであった。

住居はドイツ人学生と同じ学生寮の一部屋が提供される。以下2つの重要な制度を紹介する。

(1) タンデムプログラム（Tandem Programme）

タンデムとは「異なる言語を話す2人がペアとなり、お互いに学びあうために活動を

共にすることである。そうすることで、互いの母語によるコミュニケーション能力の向上や、パートナーのことをよりよく知り、互いの文化的背景を学ぶこと、さらには互いの知識や経験を学びあうことを試みる」(Brammerts & Kleppin, 2001:10) 外国語学習の方法である。ドイツの大学ではタンデムパートナーを見つけることを奨励しており、SprachDuo というタンデム仲介サイトも提供されている。そのため、多くの日本人交換留学生にはタンデムパートナーがいる。普通は仲介サイトなどを通して自分で探すが、エアランゲン大学では、日本学科の日本人教師である T 先生がタンデムパートナーの仲介を行っている。

(2) チューター (Tutor) / バディープログラム (Buddy Programme)

各大学出身の学生がドイツへ来たばかりの留学生に対して、ボランティアで空港への出迎えや各種手続きの手伝いなどを個別にサポートするプログラムである。

4.2 ネットワークのもつ機能

本稿で扱うネットワーク機能とは、「それぞれのネットワークが協力者の異文化適応に果たす役割」のことであるが、協力者自身も他のネットワーク構成員に対して機能を担うこともあり、ネットワーク機能にはそのような双方向性がある。本調査は、協力者による「ドイツ留学で関わったと思う人」とのエピソードに関して、中山 (2001) を参考にしながら分析した結果、在独日本人交換留学生のネットワーク機能を、大きく 6 機能に分類することができた。分類した機能のうち、情緒的機能に関して、中山 (2001) では細かく分類されていないが、本稿では、a) 気晴らし、b) 信頼、c) 安心、d) 役割の 4 項目に細分化した。また、中山 (2001) の「媒介機能」は文化的知識の提供に関するものであるが、本研究の調査ではさらに、異文化体験を提供し、行動を促進させる機能があることが認められた。そこで本稿では、中山 (2001) の「媒介機能」に相当する部分を「文化的知識提供機能」とし、そこに「異文化体験提供機能」と「異文化体験促進機能」という 2 つの機能を新たに追加して、それら 3 つの機能を「異文化学習機能」という上位機能で包括し整理した。また、「生活支援機能」は中山 (2001) には記述が見られないが、入寮の手伝いなど生活支援の事例が多かったため、高井 (1994)、田中 (2000) を参考にこの機能を付け足した。

したがって、表 2 に示したネットワーク機能のうち、情緒的機能の d) 役割、異文化学習機能の b) 異文化体験提供機能と c) 異文化体験促進機能は、本研究で新たに付け加えることができたものである。ここでは、その新たに追加した 2 機能と 1 項目に焦点を当て、インタビューの引用を例として挙げながら記述する。なお、インタビューデー

タを引用する際には匿名性に配慮して、協力者の名前はA～Pとし、協力者が挙げたネットワークの人物は仮名で表記する。さらに、2010年にエアランゲン大学日本学科のT先生に行ったインタビューデータも適宜使用する。また、筆者の補足がある場合は括弧内に記す。

表2 先行研究と本研究のネットワーク機能比較

<table>
<tr><th>高井（1994）</th><th>田中（2000）</th><th>中山（2001）</th><th colspan="2">本研究</th></tr>
<tr><td rowspan="2">情緒的</td><td rowspan="2">一緒に楽しむ・出かける</td><td rowspan="3">情緒的機能</td><td rowspan="4">①情緒的機能</td><td>a）気晴らし</td></tr>
<tr><td>b）信頼</td></tr>
<tr><td rowspan="2">話し相手</td><td>c）安心</td></tr>
<tr><td>相談・励まし</td><td>d）役割</td></tr>
<tr><td rowspan="5">勉学上</td><td>日本語</td><td rowspan="2">日本語機能</td><td colspan="2" rowspan="2">②ドイツ語機能</td></tr>
<tr><td>勉強</td></tr>
<tr><td rowspan="3">日本文化</td><td>媒介機能</td><td rowspan="3">③異文化学習機能</td><td>a）文化的知識提供機能</td></tr>
<tr><td></td><td>b）異文化体験提供機能</td></tr>
<tr><td></td><td>c）異文化体験促進機能</td></tr>
<tr><td rowspan="2">道具的</td><td>情報</td><td>情報提供機能</td><td colspan="2">④情報提供機能</td></tr>
<tr><td>物・金</td><td></td><td colspan="2">⑤生活支援機能</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>仲介機能</td><td colspan="2">⑥仲介機能</td></tr>
</table>

(1) 情緒的機能のd）役割

情緒的機能とは、交換留学生の心理的支えとなるネットワークの機能である。情緒的機能に関してはどの先行研究でも扱われているが、「役割」に関する記述はない。

情緒的機能のd）役割とは、その人と関わることによって、自分がドイツで役に立っていると感じられる機能で、主にタンデムパートナーに日本語や日本文化を教える際に与えられる。

Dはタンデムパートナーが2人いた。「エマとマリアとは、やっぱり日本語やドイツ語の話、日本のアニメの話とかした。エマは、ラピュタの話をした気がする。ジブリの話で盛り上がった」（D）と語っている。

Gにも2人のタンデムパートナーがいた。1人目のタンデムパートナーは日本語の文法に関しての質問が多く、日本語の未来形に関して話し合ったようである。2人目とは、タンデム仲介サイトを通して知り合った。彼女とは主に、「『千と千尋の神隠し』の（日本語の）論文を読ん」（G）で、日本語の質問に答えていたようである。タンデム学習

についてGは、「日本語や日本の文化のことを教えたりすると相手に喜んでもらえて、相手の役に立ってるなぁって感じた。もしタンデムする機会がなかったら、役に立ってる実感がなくてちょっとむなしくなってたかも」(G) と、語っている。

また、エアランゲン大学日本学科のT先生は、日本学科のドイツ人学生と在独日本人交換留学生にタンデムパートナーの仲介を行っている。T先生は、ドイツ語学習の目的以外でタンデム学習を日本人交換留学生に推奨する理由として、次のような点を挙げている。

> あと、そのタンデムのいいところは、例えば、タンデムやってないと、そのー、ドイツ語だけで暮らしていると、そこで、会話ができない、となるとやっぱり落ち込んじゃう。何で私はドイツ語できないんだろうって。で、そういうことばっかり、自分のできないことばっかり考えてしまうから、だんだん、そのーね、落ち込んで引きこもりになったりとか、ドイツ嫌いになったりとか、ひとつの自分の防御策としてね、「ドイツにいたくない！」、「別にドイツで一生暮らすわけではないんだからいいんだ！」っていう風になってくるわけじゃない？で、タンデムのいいところは、あのー相手が、自分の母語を勉強している、と。で、自分は相手のお手伝いをしてあげている、日本語を習う上で、ある程度優位な立場にあるわけで、役割が与えられる。なので、その劣等感ではなくて、ある程度優越感も味わえると。そこでその、心のバランスも、できるんじゃないか、と、思います。(T先生へのインタビュー：2010/10/29)

このインタビューから、T先生はタンデムパートナーの利点を、日本人交換留学生に留学生活の中で日本語・日本文化を教える機会を提供し、「自分はドイツで役立っている」という情緒的安定を与えることだと考えていることがわかる。もし交換留学生に強度の劣等感があれば、他人と深く関わることができず、ドイツ人学生と対等意識・信頼などを伴う親密な関係を形成することは困難であろう（工藤、2003a:19-20)。Eはタンデム学習について、「お互いに、対等に語学の勉強ができる感じで良かった」(E) と語っている。これらのことから、日本語・日本文化に興味のある相手とのネットワークは、協力者にドイツにおける「役割」を与え、心理的安定に役立っていたことが分かる。

(2) 異文化体験提供機能

異文化体験提供機能とは、実家を訪問する、クリスマスに招待してもらうなど、日本人同士のネットワークだけでは体験できないことを提供する機能である。この機能には、

ドイツにおける異文化体験とドイツ以外の国における異文化体験の２つがある。以下、それぞれの項目について例を挙げながら述べていく。

・ドイツにおける異文化体験

ドイツにおける異文化体験の例として、ドイツ人の友人の実家を訪問する（A、B、D、H、J、K、N、P)、クリスマスやイースターに招待してもらう（E)、地元のお祭りに連れて行ってもらう（H)、などがある。実際に体験させてもらえることにより、文化的知識も獲得している。

Dは同期の日本人交換留学生から紹介してもらったルーカスと仲良くなり、実家に招待してもらっている。そのときの様子を、「(ルーカスの家が）広くてきれいで、庭も広くって、ドイツの家っていいなーってすごく思った」(D）と語っており、実家訪問を通して、ドイツ人の生活に肯定的な印象を持っている様子がうかがえる。

Nは寮のパーティーで知り合った恋人マックスの家に招待してもらった。ドイツ人の家を訪問した際に感じた日独の習慣の違いについて、「ドイツ人の家に行っただけなんだけど、私からしたら、靴で家に入って行くことからしてカルチャーショックやから、あと作るご飯からいって違うから。１番印象的だったのが、夜にお風呂入らないっていう」(N）と語っており、驚きながらも文化的知識を獲得していることがわかる。

Hは８件以上のドイツ人家庭を訪問しており、そのうち５件はホストファミリーとその親戚の家だが、それを除いても３人の友人の実家を訪問している。まず１人目は、日本学科のドイツ人学生トーマスである。トーマスとは、留学生交流パーティーでポーランド人の友人の紹介を通して知り合った。トーマスは日本語力が高く、また寮が一緒だったため、Hはよくドイツ語の宿題を一緒に見てもらい、頻繁に会うようになった。そしてトーマスの実家にもよく訪問させてもらった。「友人と一緒に４回ほど実家に遊びに行かせてもらったり、泊めてもらって翌日、観光地を案内してもらったり、頼りになる友人でした」(H）と話してくれた。２人目は、交換留学開始後すぐに行われるオリエンテーションのチューターをしていたザンドラである。ザンドラとは９月に行われた交換留学生向けプログラム、ニュルンベルク観光の際に知り合った。バスでたまたま近くの席に座り、話が盛り上がったことがきっかけで、図書館で会うと話しかけてくれるようになった。その後、「少ししか知り合ってないのに、家に遊びにおいでよ！と誘ってくれ、泊まらせてもらってプチホームステイ体験し」(H）たようである。ザンドラの実家はバイエルン地方にあり、祖母と親戚はバイエルンの言葉を話すため全く理解できなかったという。そして、ザンドラの家を訪問したことについてHは次のように述べている。

バイエルン人って野蛮って世間では言われているけど、私は大好きです。大好きになりました。その子と出会わなければそんなドイツの方言や土着文化にも触れることはなかったでしょうね。貴重な体験をしました。(H)

3人目は、Hのバディーであったヤナの家である。ヤナとは渡独前から連絡を取り合っており、ドイツ到着後空港まで迎えにきて、入寮手続きも手伝ってもらった。その後も月1回ヤナと会い、家にも招待してもらったという。彼女はエアランゲンから少し離れた場所に住んでおり、「彼女のお母さんが一度ごはんを招待してくださって、おうちにお邪魔させてもらったり」(H)、カーニバルの時期にヤナの地元の体育館で開かれた仮装パーティーにも誘ってもらったり、さらに「私用にもエジプトっぽい衣装を用意してくれて、そこに一緒に参加させてもらいました」(H) と異文化体験について語ってくれた。これらのドイツ人の実家訪問を振り返って、

ドイツ人のお宅訪問たくさんできました。(中略) 自分でいうのもなんですが貴重な体験してますね。こう振り返ってみると。(H)

と、多くの貴重な異文化経験からドイツ交換留学に満足している様子がうかがえる。

・ドイツ以外の国における異文化体験

自分の国の文化・習慣を説明するだけではなく、実際に実家に招待してくれる他国出身の留学生もいたようである。スイス (B)、ブルガリア (C)、トルコ (E)、フィンランド (K)、スペイン (M)、ハンガリー (O) など多くの協力者がドイツ人以外の友人の実家を訪問していた。Kは渡独後すぐに行われた9月の集中ドイツ語コースでクラスメートであったフィンランド出身のエリナと仲良くなり、3月に彼女の実家を訪問した。そのフィンランド訪問に関して、「特に良かったなと思うのは、彼女が常にいてくれたおかげで、様々な現地の人と、現地の人の日常の中で交流がもてたこと」(K) と語っており、日本人同士の旅行では経験できない価値ある異文化体験をしたようである。Bは、哲学の授業で恋人トルベンと出会った。トルベンはスイス出身であり、ミュンヘン大学で哲学を専攻していた。日本語が話せたトルベンは、毎週水曜日にBと会うことを提案した。毎週会うことで仲が深まり、スイスの実家には1ヶ月以上滞在させてもらったようである。トルベンは、「ドイツより所得の高い」(B) スイス出身のため、ドイツを「見下している面があ」(B) ったが、Bはよく理解できなかった。「で、最初何言ってんだ、と思ったんですけど。で、スイスに合計1ヶ月くらい滞在してたんですけど、言っ

てることがよくわかって。なので、そういう比較してやっとわかるみたいな。(中略)(ドイツとスイスは) 大阪と京都みたいな感じですね」(B) と、最初話を聞いただけではドイツとスイスの違いについて理解できなかったが、実際にスイスを訪問する事により、スイスとドイツの文化・習慣の違いを知ることができた。このように、実際に行くことにより、話を聞いただけでは分からない文化的知識を獲得できることも、異文化体験提供機能の重要な点のひとつである。

今回、16 名中 15 名が異文化体験を提供してもらったと回答し、計 34 の事例を得た。そのうちの 15 例は、日本学科の学生あるいは日本語が話せるドイツ人・他国出身の留学生に提供してもらった異文化体験であり、最も多かった。15 例のうち 7 例は協力者がタンデムパートナーと体験したものである。また、ホストファミリーも 7 例あった。

3 月のインタビュー協力者 9 人中 7 人が、異文化体験を提供してくれたネットワークを「留学中関わったと思う 5 名」の中に挙げていた。このことから、実家に招待してくれるなどの貴重な異文化体験は、協力者の記憶に深く残り、そのような体験を提供してくれるネットワークの人物は彼らにとって重要な位置を占めていることがわかる。しかし、ホストファミリーを「留学中関わった人物」に挙げる協力者は多くなかった。大学のプログラムなどによりホームステイを経験したインタビュー協力者は 7 名いたが、「留学中関わった人物」の中にホストファミリーを挙げた協力者は G だけであった。おそらく多くの在独日本人交換留学生にとってドイツ語のみの意思疎通が難しいことと、ホームステイ後は連絡が途絶え、1 年を通して関わることが難しい点に原因があると思われる。

(3) 異文化体験促進機能

これは、1 人ではなかなかできないことを一緒に行うことで、協力者の異文化体験を促進する機能である。

E はドイツで様々なことを経験したいと思っていたが、自分のドイツ語力に自信がなく、1 人で行動する勇気はなかった。そのため、コンサートや寮のパーティー、旅行の計画などがあると、同じ寮に住む同期の友人、彩に毎回声をかけていたようである。「何かイベントがあるといつも声をかけやすい彩を誘っていた。(中略) 他の友達は興味がないと断られるけど、彩はだいたいどんなイベントでも、行きたい、って言ってくれた」(E) と語っている。

また、逆にいつも誘われることで、異文化を体験する協力者もいる。D は、留学開始後の約 3 ヶ月間、ドイツ語の授業も受講せず、タンデムパートナーと会う以外は人にも会わず、毎日を家で過ごしていた。しかし、同じ寮の同期の友人である裕美によく誘っ

てもらい、様々な経験をしたようである。「裕美のおかげで、発音の授業とか、受けてみようと思えて、すごく役立った。一緒に（ドイツのバンドの）コンサートにも行けて、すごく助かった」(D)。

Hも友人トーマスによくパーティーに誘ってもらっていた。「友人のパーティーに誘ってくれたりで、ドイツ語を使える環境へのきっかけを与えてくれたので感謝しています」(H) という回答から、行動の幅を広げてくれたトーマスがHにとって異文化体験へのきっかけになっていたことがわかる。

一人では心配だから誰かを誘って、または誘われて異文化を体験することは、多くの留学生が取る行動であろう。しかし、今回協力者の多くはこのような行動についてはあまり意識しておらず、「○○とはよく旅行にいった、カフェに行った」という記憶だけが残っている。今回は3名の協力者のみ（D、E、H)、異文化体験促進機能に関する事例を語ってくれた。また、誘われた協力者は、「すごく助かった」(D)、「ドイツ語を使える環境へのきっかけを与えてくれたので感謝しています」(H) と、異文化体験のきっかけを与えてもらったことに感謝している。さらに、「他の友達は興味がないと断られるけど」(E) という語りから、ネットワークの人物全員がこの機能を担っているわけではなく、異文化体験促進機能の有無は留学生活の満足度を左右すると考えられる。

4.3 考察

本節では、協力者に「ドイツ留学で関わったと思う人」とのエピソードを語ってもらい、その回答からネットワークのもつ機能を6つに分類した。

今回の調査では、ネットワーク機能に関して2機能と1項目を新たに追加したが、中山（2001）ではこれらの機能に関する事例が見られなかった。その理由として、調査対象者が一年の英語留学プログラムに参加している在日外国人留学生であり、原則的に住居は外国人専用の寮であるため、「学内でプログラム参加者以外の人（留学生も含めて)」だけでなく「一般の日本社会との恒常的な接触の場がきわめて少ない状況におかれている」(中山 2001:62) ことが挙げられる。在独日本人交換留学生は、タンデム学習が奨励されており、定期的に会えるタンデムパートナーと知り合っていることが多い。今回の協力者に関しても、16名のうち12名にタンデムパートナーがいた。このことから、日本語・日本文化を教える機会が多く、在独日本人交換留学生のネットワークを考える際には、情緒的機能のd）役割を追加する必要があるといえる。また、在独交換留学生はドイツ人と同じ学生寮に住んでいることから、外国人専用の寮に比べて、タンデムパートナーやパートナー以外のドイツ人学生も出入りがしやすく定期的に関わることが容易である。さらに、ドイツは他のヨーロッパの国々と陸続きになっており、他国からの留

学生の実家へ行くことも日本ほど難しくない。このような地理的および制度的理由から、在独日本人交換留学生は、在日外国人留学生に比べて、友人の実家訪問などの異文化体験を経験していることが多く、彼らのドイツ生活において異文化体験は重要な位置を占めているといえるだろう。

ここで、これまで述べてきた機能をまとめると、ネットワークには留学生の体験や行動を促す機能があるといえる。具体的には、留学中部屋に閉じこもったり、日本人同士で固まったりしがちな留学生がいるという問題がある中、定期的にタンデムパートナーとして会ったり、実家に招待したり、またコンサートに誘ったりすることで、そのような留学生を行動や体験へと促していくという非常に重要な機能がネットワークにはある。留学当初引きこもりがちだったDが、同じ寮に住む同期の友人にたびたび声をかけてもらい、「すごく助かった」(D) と話していることからも、ネットワークの体験や行動を促す機能は、在独日本人交換留学生にとって非常に重要な適応機能の1つであるといえる。

5 結論

本研究ではドイツへの交換留学経験のある日本人を対象に、「ドイツ留学で関わったと思う人」に関するインタビュー調査を行い、留学中に構築したネットワークが彼らのドイツ留学生活への適応に与える役割を、ネットワークの機能という点から分析した。その結果、先行研究では指摘されていなかった点として、ネットワークの情緒的機能が留学生に与える役割意識の重要性を見いだすことができた。またネットワークには留学生を異文化の体験や行動へと促す機能があることもわかり、それらを異文化体験提供機能と異文化体験促進機能として新たに追加し、文化的知識提供機能とともに異文化学習機能として包括整理した。そして、日独の交換留学制度を比較し、地理的・制度的側面から在独日本人交換留学生のネットワーク機能を調査するときには、特に情緒的機能のd) 役割と異文化体験提供機能を視野に入れることが重要であることも分かった。

しかしながら、本稿では、上記2つのネットワーク機能と1項目に焦点を絞って述べてきたため、協力者がどのようにネットワークを構築しているのか、また留学先の大学の受け入れ体制や地域性によって構築するネットワークが異なり、提供されるネットワーク機能にも違いがあるのか、ということまでは論じることができなかった。これについては今後の課題とし、別稿で論じたい。

主要参考文献

Bochner, S., McLeod, B. M., & Lin, A. (1977). Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, Vol. 12, No.2, Elsevier Science Publishers, pp. 277-294.

Brammerts, H., Kleppin, K. (2001). *Selbstgesteuertes Sprachenlernen im Tandem*. Tübingen: Stauffenburg Verlag.

内海由美子・吉野文「短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析　－ネットワークの観点から」『千葉大学留学生センター紀要』第5号、千葉大学留学生センター、1999年、pp. 30-55。

工藤和宏「異文化友情形成におけるコミュニケーション能力：留学生の知覚に基づくモデル化の試み」『ヒューマン・コミュニケーション研究』31号、日本コミュニケーション学会、2003a年、pp. 15-34。

工藤和宏「友人ネットワークの機能モデル再考－在豪日本人留学生の事例研究から」『異文化間教育』18号、異文化間教育学会、2003b年、pp. 95-108。

高井次郎「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8号、異文化間教育学会、1994年、pp. 106-116。

田中共子『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版、2000年。

中山亜紀子「短期留学生の対人関係に関する一試論」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第5号、大阪大学留学生センター、2001年、pp. 59-72。